

現

在我々が見ている日本橋は、日本橋川に架かる二連の石造アーチ橋であり、徳川時代の初代から数えて二十代目の橋である。木橋から石橋に変えただけでなく、アーチとして前例のない偏平なアーチを採用し、橋の幅を石橋では考えられないほど広くしている。このようなことが可能であった背景には、この明治期に素晴らしい技術者がそろっていたことが挙げられる。

明治四十四年に架橋されたこの橋は、ご承知のように日本の道路の起点として位置づけられている。現在では、アジアハイウェイ一号線の起点でもある。橋そのものはルネッサンス様式、照明柱はバロック様式、橋上の装飾部分には、威厳を持たせようと麒麟と唐獅子の像が配置され、和洋折衷のデザインとなっている。明治時代の技術と芸術のコラボレーションがなせる技である。

日本橋は単に車や人を渡河させるだけの構造物ではなく、歴史、文化等を包括した文化資産でもある。それが証拠に、江戸時代の浮世絵には日本橋、江戸城、富士山の三点セットが象徴として描かれているものが多い。現在の石橋も激動の時代を経験しながら、架橋百年を平成二十三年に迎えた。第二次世界大戦の時の焼夷弾痕も残っている。昭和三十八年には日本橋の上に首都高速道路が開通した。米寿（八十八歳）を迎えた平成十一年には国道の道路橋として初

各 人 各 説

日本橋の保存と人材育成

早稲田大学創造理工学部社会環境工学科 教授

依田照彦

Teruhiko Yoda



めて、国の重要文化財として認定されている。開橋から約一〇〇年を経過した日本橋は、次の百年に向けて、保存のための補修工事を実施した。日本橋本体の補修のみならず、将来に向けての日本橋の保存と管理のあり方についても議論がなされた。石造アーチ橋本体、橋詰広場などを、ハード的な対応だけでなく、ソフト的な対応を含めて考える必要があるとの結論である。日本橋には、地域の核として、人々に愛される橋として、みち・まち・ひとの原点であり続けて欲しいとの思いがある。技術・機能・文化の面から日本橋の保存と管理を考えるためには、ハードとソフトのコラボレーションとそのための人材が欠かせない。

幸いなことに素晴らしい技術者はいつの時代にもどこかにいる。このことを前提とするならば、将来を託す技術者には、伝えなければならぬ技術を見せなければならぬ。よい技術を見せ続けなければ、良い技術者は育たないのである。良い橋梁が消えていけば、それと共に橋梁技術者も消えることになる。つまり、日本橋のような技術的に優れた橋を保存・管理することは単に橋を長寿命化させているだけではない。良い橋を良い状態で次世代に遺すことが、最小の費用で最高の人材育成につながる。日本橋の適切な保存と管理には、技術の継承のみならず、人材の育成という重い役割が託されているのである。